

令和7年度 学校評価報告書（目標設定・実施結果）

視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月26日実施)	総合評価（3月5日実施）	
			具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
1 教育課程 学習指導	○幼稚部から高等部にかけて系統立てた指導の実施により、社会で豊かに生きていくための基礎学力とコミュニケーション力を身につける。	①カリキュラムマネジメントを推進し、学部間の連続した系統性のある指導を実践して基礎学力やコミュニケーション力の向上を図る。  ②一人一台端末を活用して視覚的支援を充実させるとともに、専門性を活かした教材の工夫により、個々の発達段階と課題に応じた効果的な指導を実践する。	①個別教育計画の作成と年間指導計画の整理を行い、ねらいと手立て、評価を明確にした指導と評価の一体化を図る。他学部の研究授業や公開授業への参加を通して、系統的な指導の理解を深める。  ②学校全体でICT機器の活用を積極的に取り入れ、視覚的支援を行うことでわかりやすい授業を実践する。ICT機器の効果的な活用に向けた情報の共有や研修を推進する。	①個別教育計画に基づき、適切な目標設定と手立てによって効果的な指導につながれたか。研究授業や公開授業への参加を通して、学部間の系統性を意識するとともに授業力を向上させることができたか。  ②一人一台端末の活用に係る情報の共有や研修を実施し、ICT機器の効果的な活用を図ることができたか。	①アセスメント結果を個別教育計画に反映させて目標設定を行い、効果的な指導につなげた。「個別教育計画～作成マニュアルと文例集～」を作成した。他学部体験週間を実施し、学部を超えた授業実践を共有し、授業改善につなげた。学部間の授業実践を共有し、授業力の向上と系統性の確保に努めた。個別教育計画やシラバスを作成・改善するとともに、作成マニュアルの整備や自立活動との関連整理を行い、日々の授業に反映できる体制を整えた。また、手話・日本語・発音発語・聴覚活用の指導についての実態把握や助言、学部を超えた連携を進め、児童・生徒の実態に応じた指導改善を図った。これらの取組により、学習環境の整備と基礎学力・コミュニケーション能力の向上につなげた。 ②一人一台端末やPC、電子黒板、デジタル教科書、教育アプリの活用が進んだ。iPadやChromebook等の端末に係る校内研修を実施、授業での機器活用が進んだ。	①学部間の連続性・系統性を踏まえた指導による基礎学力・コミュニケーション能力の向上について引き続き組織的に取組む必要がある。他学部体験週間等、教員が互いに授業を参観できる取組や聴覚障害教育の専門性の維持向上に関する研究に力を入れる必要がある。今後も、学習環境の整備と基礎学力・コミュニケーション能力の向上に努めていく。  ②一人一台端末の活用や電子黒板、デジタル教科書等の効果的な活用について共有し、教員の活用能力の底上げが必要である。	①保護者アンケート 肯定的評価 96.8% R6年度 97.6% 〈学校運営協議会〉 ・アセスメント結果を反映した個別教育計画の作成は良い。「個別教育計画作成マニュアルと文例集」については、先生方が活用できるように研修等をしていく必要がある。 ・他学部体験等の学部を超えた取組をもっと拡充させてほしい。  ②保護者アンケート 肯定的評価 96.4% R6年度 90.0% 〈学校運営協議会〉 ・教科におけるICTの活用については、活用例が具体的にわかるとよい。	①個別教育計画に基づき、適正な目標設定と手立てによって効果的な指導につなげることができた。「個別教育計画～作成マニュアルと文例集～」を作成し、個別教育計画を効率的に作成することができるようになった。今後は、活用状況を検証していく。6月と9月の他学部体験週間では、学部を超えた授業実践の共有を通して授業改善や授業力の向上につなげるとともに、学部間の系統性について意識を高めることができた。自立活動では、手話・日本語・発音発語・聴覚活用の指導の4つの柱のバランスを踏まえながら取組を工夫し、子どもたちの実態に応じた指導・支援ができた。  ②各学部において、ICT機器の活用がさらに進んだ。視覚的支援の充実や、専門性を活かした教材の工夫により、主体的な学びにつなげ、成果を上げてきている。更なる効果的な指導を実践し、より多くの教職員が活用できるようにする。	①引き続き、アセスメント結果を個別教育計画に反映させていく。個別教育計画に基づいた指導・支援を行う。マニュアルについては、全職員が効果的に活用できるように周知を行い、活用状況を検証していく。他学部体験週間をはじめ、研究授業や公開授業等において新たな発見や気づきから、自身の授業改善につなげられる取組を継続していく。また、お互いの授業を参観できる体制を構築する。自立活動の4つの柱のバランスを保てる取組を行っていく。教職員が入れ替わっても継続できる取組を検討していく。
2 幼児・児童・生徒指導・支援	○それぞれの実態を十分把握し、ニーズに応じた指導・支援を行うとともに、集団活動を通して、協調性や思いやりの心を養い、自己肯定感を高める。	①幼児・児童・生徒の健康と安全を守り、一人ひとりのニーズに応じた教育活動を推進する。  ②校内外の様々な集団活動を通して互いの良さを認め合い、自他を大切にするとともに、配慮した指導を進める。	①学部・学年会及びケース会等を通して情報共有を図り、支援方法について専門職を含めたチームで検討し支援を行う。  ②様々な縦割り集団の対話的な活動を通して、相互理解を図るとともに、協調性や思いやりを育む支援を行う。	①幼児・児童・生徒の見立てに基づく支援を行い、健康と安全を守ることができたか。  ②様々な集団活動を通して互いの良さを認め合い、相互理解を深める教育活動を実践できたか。幼児・児童・生徒の協調性や思いやりの心を養うことができたか。	①日頃の情報共有に加え、ケース会議、専門職との連携を行い、幼児・児童・生徒の支援についてチームで検討することができた。  ②校内での縦割り集団活動を通して、互いの良さを認め合い、相互理解を深めることができた。協調性や思いやりの心を養うことができた。	①情報共有のための時間の確保といじめ防止についての共通理解を図り、未然防止、早期発見に努める必要がある。  ②幼稚部から高等部まで交流ができる強みをいかした交流活動を行っていく。交流学習の位置づけを教科学習との関連の中で明確にする。	①保護者アンケート 肯定的評価 90.3% R6年度 88.1% 〈学校運営協議会〉 ・ケース会議の充実を行ってほしい。ケース会議だけでなく、オンザフライミーティングや毎日の振り返りや話合いの時間が大事で教職員のコミュニケーション能力の向上にもつながる。 ②保護者アンケート 肯定的評価 93.5% R6年度 95.2% 〈学校運営協議会〉 ・校外の交流活動のさらなる発展を期待する。	①日頃の情報共有やケース会議を行い、チームで検討することができた。今後も、できるだけ多くの関係職員がケース会議に参加できるような会議設定の工夫が必要である。いじめ防止 SNS 等の使用よってのトラブルについては、生徒同士で話し合う機会を設けた。年2回のアンケートだけでなく、家庭との情報共有や早期発見・対応を行い未然防止に努めた。 ②校内外での集団活動を通して、互いの良さを認め、協調性や思いやりの心を育むことができた。対話を重ねることでコミュニケーション能力の向上にもつながった、今後は、更なる交流活動の内容の充実を進めていく。	①今後も、日頃の情報共有を綿密に行い、必要に応じてケース会議や専門職との連携を行っていく。ケース会議に関係職員が参加できる会議設定を行う。日々の子どもたちの様子を丁寧に見守り、些細な変化にも気づき、子どもたちの発信を見逃さないようにする。  ②引き続き、幼稚部から高等部までの縦のつながりを大切に集団活動を進めていく。校外の交流活動の充実にも努め、地域とのつながりを強化していく。
3 進路指導	○幼児・児童・生	①幼稚部から高等部の	①各発達段階において、将	①各発達段階におい	①高等部においては、学部	③各発達段階の二	①保護者アンケート	①各学部所属の進路担当を中	①発達段階に応じた進路

	視点	4年間の目標 (令和6年度策定)	1年間の目標	取組の内容		校内評価		学校関係者評価 (2月26日実施)	総合評価(3月5日実施)	
				具体的な方策	評価の観点	達成状況	課題・改善方策等		成果と課題	改善方策等
	支援	徒・保護者のニーズを受け止め、職業観を育み、主体的な進路選択ができるよう指導・支援する。	各段階において、個の適性やニーズに応じた課題設定や体験的な学習を通して、主体的な進路選択につなげる。  ②主体的な進路選択に必要な情報発信の充実を図り、ニーズに応じた支援を行う。	来の進路選択につながる具体的な視点を設定し、見学会や実習等の体験的な学習を積極的に推進する。「卒業生のお話を聞く会」を継続して設定し、生徒自らの将来像をイメージしやすくする。  ②進路だよりや学校ホームページ等を通して、学習会や見学会等の情報を保護者に発信し、より良い進路選択につなげる。	て、将来の進路選択につながる具体的な視点を設定するとともに、体験的な学習を通して、主体的な進路選択に向けた意欲を育むことができたか。  ②保護者への情報発信を通して、連携して進路支援に取り組むことができたか。	所属進路担当を中心に、各担任と情報共有を図り、校外学習や現場実習を実施した。校外学習で卒業生との懇談を取り入れたり、見学したりすることで具体的な理解を促すことができた。「卒業生のお話を聞く会」は荒天により中止となったが、卒業生が作成した発表資料を授業で活用したり、校内に掲示したりすることで、生徒の自らの将来像をイメージすることができた。  ②進路だより「羅針盤」では企業から頂いたアドバイスを掲載したり、家庭に協力していただきたい事項を具体的に記したりして、情報提供の機会を充実させた。	ーズに応じた進路選択につなげていく。幼稚部、小学部のうちに身に付けておく力は何か明確にしておく必要がある。  ②今後も、進路だよりや学校ホームページを活用して情報を保護者に発信していく。進路においては、幅広い選択肢がある。教員が十分理解する必要がある。	肯定的評価 95.4% R6年度 92.1% 〈学校運営協議会〉 ・進路支援はキャリア教育と直結している。将来どんな自分になりたいか、そのためにはどんな努力が必要か考えること。幼稚部からの進路指導が大事で発達段階に応じた支援が必要。主権者教育も大事である。これは自分がどういう人生を選ぶかである。  ②保護者アンケート 肯定的評価 93.5% R6年度 87.8%	心に、各担任と情報共有を図り、学部・学年の実態に合った校外学習や現場実習を計画し実施することができた。卒業生のお話を聞くことは、生徒たちにとって身近な先輩から話を聞き、自分の将来像につなげることができた。今年度は、デフリンピックに出場した先輩との交流もできた。今後も、幼稚部から高等部までのキャリア教育の充実を推進していく必要がある。  ②進路だよりや学校ホームページを通して、学習会や見学会等の情報を保護者に発信できた。ニーズに合った丁寧な情報発信を継続できた。	指導、キャリア教育の充実を図っていく。子どもたちが自分の将来を描けるよう働きかけを行っていく。  ②今後も情報発信の工夫を行っていく。幼稚部段階から卒業後の進路を意識できるように、進路担当・担任が正しい知識を身に付け情報提供ができるようにしていく。また、進路の見通しや今できることは何か子どもたちや保護者とともに考えていく。
4	地域等との協働	○「ともに生きる社会」の実現に向け、地域における支援教育に関する専門性の向上を図るとともに、地域との協働による活動を進める。	①関係機関と連携し、支援の方向性を共有して教育活動に活かしていく。  ②センター的機能を発揮し、地域への情報発信を充実させてニーズに応じた支援を提供する。  ③交流及び共同学習等、学校外の人との活動を通してコミュニケーション能力を高め、相互理解を図る。	①病院や福祉機関等との情報交換を計画的に推進し、支援ニーズの把握や支援策を共有していく。  ②学校や市町村教育委員会とも連携し、地域で学ぶろう難聴児の支援につながる情報を発信していく。  ③近隣の学校や地域の団体、施設等との交流及び共同学習を通して、人と関わる機会を積極的に設定し相互理解を深める。	①関係機関と情報交換を計画的に行い、ニーズに応じた支援を推進することができたか。  ②センター的機能を発揮し、地域で学ぶろう難聴児の支援につながる情報発信ができたか。  ③各学部のねらいや個々のニーズに応じた交流及び共同学習の機会を通してコミュニケーション能力を高め、相互理解を深めることができたか。	①医療機関との情報交換会をオンラインで行い、ニーズに応じた支援を推進した。  ②巡回相談、研修会、地域の学校での難聴理解授業の支援等を実施した。また、サマーコミュニケーションスクールを実施した。  ③校内外との集団活動や交流及び共同学習等を通して相互理解、協調性、思いやり、社会性、コミュニケーション力の向上につながった。	①引き続き、持続可能な取組を継続し、教育活動に活かしていく。  ②今後は、ろう難聴児支援の充実を目指して、聴覚障害者福祉センターとの情報共有の機会を増やしていく必要がある。  ③引き続き取り組んでいく。年間を通した行事計画を見直し、交流が集中しないようにする必要がある。	①②保護者アンケート 肯定的評価 90.0% R6年度 87.2% 〈学校運営協議会〉 ・地域との関わりを拡充してほしい。  ③保護者アンケート 肯定的評価 87.1% R6年度 78.0% 〈学校運営協議会〉	①医療機関との情報交換会を計画的に進め、ニーズに応じた支援を推進した  ②各市町村の教育委員会とも連携し、地域で学ぶろう難聴児の指導支援の充実に向けた情報を発信し、支援の充実に寄与することができた。今後も、関係機関と連携していく必要がある。  ③近隣の学校との交流を通して、学校以外の様々な人と関わることができ、コミュニケーション能力や協調性を高めることができた。今後もより合理的で持続可能な交流の在り方を検討していく。	①持続可能な病院連携を行い、指導・支援に活かす。  ②引き続き地域への情報発信を充実させ、ニーズに合った支援を提供していく。ろう難聴児支援の充実を目指し、聴覚障害者福祉センターとの情報共有の機会を増やしていく。  ③交流及び共同学習の狙いを明確にし、計画的に実行していく。
5	学校管理 学校運営	○安全で安心できる指導・管理体制の整備を進め、学校の危機管理能力を高める。  ○教員のワークライフバランスを推進するために、教員の働き方改革を推進する。	①防災・防犯体制の強化を推進し、対応マニュアルの整備や実効性のある訓練を通して、教職員の危機管理意識の向上を図る。  ②子どもたちと向き合う時間を確保するための方策を検討し、教育活動の質の向上を図る。	①保護者や消防署等、関係機関と連携し、実際に起こり得る状況を想定した訓練等を実施する。  ②Teamsの掲示板利用等、会議の効率化や文書の簡素化、業務の統合や廃止によるスクラップアンドビルドを推進する。	①関係機関と連携し、実効性のある訓練をして、教職員の危機管理意識の向上を図ることができたか。  ②子どもたちと向き合う時間を確保することができたか。また、そのことで教育活動の質の向上が図れたか。	①関係機関と連携し、色々な場面を想定した訓練や研修を実施した。体験型の研修を通して、危機管理意識の向上を図ることができた。  ②ICTの利活用を行い、業務の効率化を進めた。業務アシスタントや業務サポーターと連携して、教職員の仕事の軽減に努めた。	①訓練や研修内容の精選、追加等を検討し、より実効性のある取組になるよう関係機関との連携を密にする必要がある。  ②ICTをより多くの教員が学習指導場面や校務において活用できるように、研修を重ねていく必要がある。	①保護者アンケート 肯定的評価 75.9% R6年度 73.8% 〈学校運営協議会〉 今後は、より具体的な想定をした訓練やポイントを絞った訓練が必要。 ②保護者アンケート 肯定的評価 96.8% R6年度 95.2% 〈学校運営協議会〉	①体験的な活動を通して、実効的な訓練となった。危機管理意識の向上につながった。今後は、教職員のニーズや子どもたちの実態に合わせた訓練や研修が必要である。  ②ICTの利活用を進め、業務の効率化を行った。アンケートについては、Formsを活用することによって回答率も上がった。教職員の働きがいやウェルビーイングを推進していく。	①関係機関や地域と連携して、より実効的な訓練をしていく。教職員の危機管理意識をより高めていく。  ②業務のスクラップアンドビルドに取り組んでいくと同時に、教職員の働きがいやウェルビーイングを推進していく。